

## 瑜伽行派の思想展開と実践 (レジュメ)

本村耐樹 (名古屋大学)

瑜伽行派の思想の最も大きな特徴は『撰大乘論』(Mahāyānasamgraha) で述べられるように、我々の心としてのアーラヤ識のみが実在し、それから顕現した現象世界は虚妄なもので実在しないとする、所謂、唯識無境を説くことであると考えられている。しかし、瑜伽行派の最初期に編纂されたとされる『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi) 『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi) を見ると、それとは異なった思想が見受けられる。そこでは、対象と言葉の関係について考察がなされており、一切諸法は本来、言葉、すなわち概念設定を離れた「ものそのもの」(vastumātra) として実在するのであるが、凡夫はそれを様々な概念設定を通して「これはまさに地であって火ではない」などと区別している。しかし、これら概念設定というフィルターを取り除いて対象を観るとき、それら対象は「ものそのもの」である平等なものとして把握されることが説かれている。すなわち『菩薩地』においては世俗から悟りへの転換は vastu という対象の転換理論として述べられ、『撰大乘論』ではアーラヤ識としての我々の心の転換理論として説明されているのである。

このように瑜伽行派における世俗から悟りへの転換の理論は対象から心へと大きく変容している。本発表ではこのような変容において、瑜伽行派のヨーガの実践理論に見られる言葉 (jalpa) が大きな役割を果たしていることを明らかにする。jalpa に注目することによって、瑜伽行派は世俗から悟りへの転換理論を、瞑想対象を中心とするものから瞑想する主体へと変容させることを通じて、ナーガールジュナが構築した高度な「空」の理論体系と、ヨーガの実践という生きた体験を融合し、般若経典に説かれる「空」を実践的側面から理解しようとした意図を窺い知ることができる。そして、その結果完成されたものが唯識無境の理論であったと考えられる。したがって、唯識無境における「唯識」や「無境」の意味を、単に、識の実在を主張するものであるとか、外界対象が存在しないことを意味するものであるとするのは瑜伽行派の「空」の理解を誤解することになってしまう。瑜伽行派の思想は常に実践という側面において理解することが重要なのである。

〈キーワード〉

瑜伽行派、vastu、アーラヤ識